

# 自画像と自我像

—渡辺一夫『敗戦日記』を読む—

クレアモント 康子

渡辺一夫は東京大学仏文学の教授で、フランス・ルネッサンス、特に、フランソワ・ラブレールの研究者、そして、1949年出版の『きけわだつみのこえ』の編者としても著名です。1901年に東京本郷で生まれ、1975年に亡くなっています。明治、大正、昭和の時代を生き、太平洋戦争をはさんで日本の近代化の苦しみを体験した学者であるわけです。

私は『渡辺一夫敗戦日記』<sup>1)</sup> 博文館新社、1995年出版の扉のページを飾った墨の濃淡で描かれた自画像が極めて、印象的であると思います。日付は昭和20年4月24日、友人の串田孫一氏にあてた葉書です。「壕内腐儒閑々黙々」「祈御多幸」と書いてあります。この自画像とそれに直接に関係する日記に書かれた渡辺一夫の自我像との関連性、渡辺の心の対話、そして、「敗戦日記」の読者である私たちとの関係を考察し、戦争末期を生き抜いた一知識人の心の姿勢の今日における意味を探ってみたいと思います。

まず、自画像について。私ははじめ、非常時で壕内にあっても、学者は勤勉そのものであると、いたく感心しました。その気持ちは今も変わりませんが、よく細部を観察してみますと、辞書のような部厚い本、拡大鏡、灰皿、マッチ、きせるの煙、防空壕内の狭さ、夜はもとより日中でもこれで本当に本が読める状態であるのか、疑問です。渡辺はあぐらをかいて、頭を腕にもたげ、どうやら、思いこまねいているようです。言うまでもなく、これは壕内に余儀なく押し込められてしまった「腐儒」からの自己検証であるでしょう。「腐儒」は蕪村の俳句、「腐れ儒者子曰くとみそをすり」からの引用で、渡辺一夫らしい謙遜と

ユーモア、精神的余裕さえ感じられます。その当日の記載は「敗戦日記」には見られないのですが、4日前、昭和20年4月20日に大空襲があつて、串田氏の家が焼けてしまったことが分かります。敗戦間近の明日をも知れぬ東京の焼け跡から、愛弟子であり、友人でもある串田氏に励ましの気持ちをこめて、葉書を送られたのです。励ましの中身は「私も何とか自分の仕事を続けていますが、将来を思って、どうしてよいやら苦しんでいます。」ということだと思えます。また、それは明日の命の保証のない時、渡辺一夫の串田氏への遺書／遺画とも思われます。

「敗戦日記」もその意味で遺書であると言っても過言ではないと思えますが、渡辺の戦後のめざましい教育と出版活動からみれば、実は、戦中に自己に課した自我保全あるいは自己鍛錬のための記録ではなかったかと思われまゝ。それは何かと言えば、人文主義、ユマニズムを説く者の身をもっての実践であるでしょう。渡辺の言葉で定義すれば、「ヒューマニズムとは、人間の機械化から人間を擁護する人間の思想である。割り切れない始末に困る人間性の認知を不断に持って、懸命にその解決を求め続ける精神である。ルネサンス期の宗教改革、18世紀のフランス革命、産業革命、19世紀の共産党宣言を一貫して流れる人間の最も人間らしい懸命な努力である。」<sup>2)</sup>とあります。ヒューマニズムの実践が戦中いかに困難であったかは言うまでもありません。こう考えると串田氏にあてた自画像は渡辺自身をふくめたヒューマニズムの実践への努力ということになります。

さて、日本文学で日記文学といった場合、伝統的には、古典の日記体をとる、記録、回想、物語形式の文体を指しますが、近現代の日記、特に、私的な戦中の日記の場合は、基本的には文学的価値判断の範疇ではないと考えます。しかし、文学性を考えた場合、書き手の問題意識が一般の人間の普遍的問題意識に通じるものであり、読者がそれに共感し、共有するものであれば、やはり、優れたものとそうでないものが自ずから生じます。野坂昭如は2002年、『「終戦日記」を読む』<sup>3)</sup>の中で、「人間が、自分の気持を文字にする場合、日記だろうと、

手紙だろうと、自ずからをそのまま写すことは、まずできない。文字という、伝達手法の、いかんともしがたい特性。」<sup>4)</sup> と言い、そして、無意識のうちに作為性が出て、ゆがんでしまうが、それでも、筆者の「文字」だけではつたえられない真実が浮び上る、と野坂らしく正直に書いています。彼のいう「書いている自分は、同時に読者でもある。」というのは確かですし、特に日記の場合、書き手と読者は唯一無二で、告白でもあり、文字自体の表現を越えて書き手の真実の思いが感知されるものであると思います。

渡辺一夫の「敗戦日記」は読まれるであろうこともあるとして、短期間（1945年3月11日から8月18日までの5ヶ月と7日）に書かれました。日記は45頁、原文は大方がフランス語で日本語文も混じっています。もちろん、当時を考えれば、軍や警察を考慮してそうしたものに違いありません。渡辺一夫没後、お弟子の二宮敬氏が残された蔵書の中から発見し、ご家族の了解を得て、1976年『世界』1月号に初出されました。書かれてから30年、日記は埋もれていたわけです。生前に公開されなかったことは、渡辺が私的日記だと考えたからでしょう。しかし、日記の6月6日の項に、「この小さなノートを残さねばならない。あらゆる日本人に読んでもらわねばならない。この国と人間を愛し、この国のありかたを恥じる一人の若い男が、この危機にあってどんな気持で生きたかがこれを読めばわかるからだ。」<sup>5)</sup> とあるので、渡辺は日本存続の危機にあって、一人の生き証人として、日記を書いていたことが分かります。生き延びることが「義務」で、将来の日本に役に立ちたいと明記されています。

現在、戦中の日記は兵士、一般人、作家、それぞれの分野の専門家のものも、数多く、出版されています。『敗戦日記』の二宮氏の解題に渡辺一夫の日記の特徴がよく整理されていますので、引用いたします。

「それらに対して先生のそれは、日常些事の記述に乏しく、正確な情報にも乏しい。その反面において、西ヨーロッパのヒューマニズムの根源に分け入ってこれと正面から取り組み、日本人としてこれを血肉化した知識人が、

孤立の中で知識人のありかたを考えていかに苦悶し、いかに正確な判断を下そうとしていたかを示す数少ない実例といえよう。」<sup>6)</sup>

ヒューマンズムという言葉は一律な意味、定義がありません。一般に、理性に価値をおいた人間的行為であるのですが、渡辺の場合は、いたずらに神頼みをしない、人間性の回復をめざしたルネッサンスのユマニズムであることが大切であると思います。現在を考えた場合、どのような思想も、例えば、共産主義も構造主義もポストモダンニズムもテロのような世界の危機を解決するには至らなかった。それを思えば、こうした根源的な人間性に根ざした精神がより求められるのではないかと考えられます。その実践者としての渡辺の日記記述の特徴と見られるものの2、3を考察したいと思います。

中野重治が渡辺一夫との公開往復書簡<sup>7)</sup>で看破したように、また、大江健三郎氏が『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』<sup>8)</sup>の中で指摘しているように、基本的には渡辺は人間の弱さに理解がある点において、ペシミスティックですが、それに対抗する彼の姿勢はオプティミスティックです。それは「敗戦日記」の希望と絶望が反復するパターンにも見られます。

例えば、最初の日付3月11日に日記を始める抱負があります。「今日、僕は日記の筆をとることにした。気持が変わったのは、筆をとらしめるに足る説得的な理由、いささかの希望を見出したからである。ここに記す些細な、あるいは無惨な出来事、心覚えや感想は、わが第二の人生において確実に役立ってくれよう。僕が再生し、復讐するその時に。こういう言葉が、ごく自然に出て来たが、それほどに決意は固く、かつ熟慮の上ということだ。」<sup>9)</sup>。「わが第二の人生」には点がふつてありますので、渡辺は戦後を強く意識していたものと思います。渡辺に日記を書かしたしたのは、書くことが自分の再生に役立つからということですから。前日の10日にB29、325機の無差別焼夷爆弾で東京は死者8万人以上を出したと二宮氏の注があります。渡辺は渋谷区笹塚に在住していましたから、まさに戦渦にいたわけです。渡辺は理知的でありたいために、現状を分析し、日

本の軍国主義、精神主義、封建主義を非難、そして、教育普及の低さを日記中で嘆いています。もちろん、時の衰勢は個人の力の及ぶことではありませんが、渡辺は3月12日付に「もし竹槍を取ることを強要されたら、行けという所にどこにでも行く。しかし、決してアメリカ人は殺さぬ。進んで捕虜になろう。」<sup>10)</sup>と、あります。

日記の第一行にダンテの『神曲』から引用で「一切の望みを棄てよ」とあることから、まさに暗い時代でした。戦死、爆死は日常茶飯事であるという非常時、そして、渡辺も自殺を考えていたようです。5月4日付、「自殺の誘惑はけっして目立たず、強くもないが、それだけにはとつする。」7月11日付け、「自殺を考える」など、記載があります。しかし、そのすぐ後に、生の力を信じる強さが語られています。例えば、6月20日付け、「しかし血が流されるほど、人間の善き意思はいっそう強固となり、人々の心に拡がってゆく。」「生ねばならぬ、事の赤裸々な姿をみきわめるために。」など、戦時にあれば、このように起伏する心の対話はもっともであるでしょう。軍事体制が崩れていき、何一つ信頼できるものが無くなった時に近い間でも、「孤独感」「疎外感」「不信感」の存在をいなめません。国も自殺状態であるので、渡辺は「我国は死ぬべきだ。その上で生れ変わらねばならぬ。」と、日本の現状に愛憎をこめて、オウィディウスの言葉を引いています。「できうれば憎まん、然らずんば心ならずも愛さん。」。また、近藤信行氏の言葉で、「日本を愛することは日本の死を望む」<sup>11)</sup> ことにほかならなかったのです。

渡辺の日記は、しかしながら、彼個人だけの視野にたっているものではないです。彼のユマニズムは広く他者を視野に入れていきます。3月20日付けの項には、疎開先の家族の安否を心配しながらも「この位の悲しみは何でもないのだ、支那の人々が帝国軍閥から受けた苦しみと比べれば」とあり、彼は日本軍の残虐さを糾弾し、別の記載では軍が同胞に対してもそうであることを明記しています。特に、まわりの人たちが現実を直視せず、口先だけとしても、常に日本の勝利を述べていることに、憤慨を禁じられません。渡辺の真理を見る目、そ

れを述べる勇氣はまぎれようもありません。しかし、彼の態度は常に人間愛に満ちていて、例えば、父親が勝利を信じていることを「父の抱いている古ぼけ失われた夢を、そっとしておくこと。」と言って、寛容です。大学辞職も考えたようですが、詳細は書かれていません。たぶん、学内での意見の相違、葛藤などがあったのでしょう。

3月15日の記載に渡辺の翻訳書ラブレーの『第二之書 パンタグリユエル物語』の印刷所が空襲で焼け、刷り上がった一切が焼けたとあります。日記には「ラブレーは遂に日本では無縁なのだろう。」とあるだけなのですが、大江健三郎氏が『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』中で、更に、深い読みをしていられます。焼けてしまった翻訳書の序に、実はその当時苦しんでいた若者にむけての理解を促す文があったのです。それは、16世紀のフランスと20世紀の日本と比べようもないけれど、戦争という非常時を生き延びるということに関しては、同じであって、フランスのユマニストたち、例えば、ラブレーがパトロンにお金をせびるなどいやしいことをしたが、それでも自分の仕事、信念を守った。いいかえれば、日本の若い人たちになんとしてもこの窮境を生き延びてほしいという願いが書かれていたのです。学徒出陣は1944年であり、そのうちの20万人ほどの学徒が戦死したことを考えれば、大学でその渦中にあった渡辺の思いはどんなであったか言葉に窮します。7月7日渡辺は「泣きたい気持ちなり」と記しています。

戦中であっても、世界のニュースが届いていたことがわかります。例えば、5月4日あるいは7日も読めるそうですが、そこに、ヒットラー、ムッソリーニ、ゲッベルスの死を報じて、「苦しんでいる人類にとって、何たる喜び！ いずれも怪物だった。」とあります。7月22日付には新聞にポール・ヴァレリーのパリでの死去が報じられていましたが、ヴァレリーのような精神の自由と繊細な文化を求めたフランスの知と良識を代表するような思想家があまりにもそっけなく報道されているのに憤慨しています。一読者の私には、このように、時代がすぎていくのを目のあたりにする経験になりました。一個人の生きた記録に

世界の動向が生きているわけです。

また、渡辺がこの日記中に記した読書の量、質、ともに印象的でした。日付の記載が45日、その中に少なくとも13冊以上が読み込まれ、読後感やその他の本からの引用文が多々あります。例えば、シュバイツァー伝、デュアメル『文明』、ロマン・ローランの『動乱の上に立ちて』など、いずれも、無聊を楽しむことからほど遠く、自己を励ます書であり、引用文が書かれています。トロワイヤの『ドストエフスキー』からの引用文もあります。例えば、「私は一人ぼっちで、彼らは全員なのだ。」、また「その人々の間で一人の人間であること、どんな事情があろうと永久に人間であり続け、挫けないこと、倒れないこと。これこそが人生、これこそが人生の意味なのだ。」。ロマン・ローラン(1866-1944)もナチと独裁的国家社会主義に反対声明をしたために亡命しなければならなかった人でした。読書は古今のユマニスト作家の評伝が多いようです。

これらの本から、渡辺は時代を越えた人間社会の同時代性を汲み上げたのでしょう。それは戦後すぐに渡辺の著書『フランス・ルネッサンスの人々』に開花しています。1946年から1964年にかけて、出版されたこの本は、フランス・ルネッサンスを生きた著名な12人の評伝で、フランス文学の普及に「大きな門」を開いたものです。大江健三郎氏をはじめ、多くの戦後の若者に影響を与えました。読者に分かりやすく、学問的文献に基づき、注釈を加え、自分の言葉でフランスの宗教戦争を生き抜いた人間たちの記録と彼らの生き方を示しています。戦後の思想的に混迷した時代の若い読者に向けて書かれたものです。その書き方は、私は大変、渡辺らしいと思います。つまり、歴史上の人物たちを生きた人として描いているからです。1章ごとに、「ある陶工の話（ペルナル・パリッシーの場合）」、「ある王公の話（アンリ四世の場合）」など、「ある」という言葉で読み手は一般の無名から歴史上に有名な個人名へと紹介されるわけです。渡辺の奉じるユマニズムは人間を人間として、強いところも弱いところも含めて、そのままに受け止めて、なおかつ、後世に受け継がれる仕事をした偉大な人々として賞賛しています。学者の仕事が同時代的に意味があるというこ

とは、すばらしいことです。

渡辺の生きた時代は奇しくもロシアのラブレー研究家のミハイール・バフティーン（1895-1975）と同時代です。スターリン独裁制の下でバフティーンは渡辺と同様に自由を奪われていましたが、両者ともラブレー、ルネッサンス、などについて、貴重な研究を残されました。その根本にあるものは、逆境にめげない自由でかつ豊かな批判精神—ヒューマニズムであると思います。

さて、「敗戦日記」の文体について述べたいと思います。私は原文のフランス語について述べる資格はまったくないのですが、日本語になった文を見ただけでも、文体は簡潔明瞭、形容詞は最小限度です。しかし、比喩的な表現は読者の胸にいっそう強く響きます。たとえば、横須賀海兵団に入団した教え子の言葉、「ガリー船そのものです」とあるだけです。ガリー船は奴隷が漕いだ帆船です。また、絶望が怒りになる時、表現は、例えば、「一億特攻隊＝文句を言わず全員死んでしまえ」「玉砕＝やけっぱちの死人」など。

これに比べ、戦後に書かれたものは、ユーモアがあり、「敗戦日記」の緊張感からは遠くはなれています。例えば、串田氏への手紙に渡辺の子供たちが進駐軍のチョコレートをはしがり、買ってやりたいが1つ20円もする、7つ買ったなら150円の自分の給料はなくなってしまう。そのために、父親の雇われ人になって、家の周りの世話をする。<sup>12)</sup> また、1949年の『展望』3月号に掲載された中野重治と渡辺一夫の往復書簡に中野が渡辺にフランス文学だけでなく、フランスの歴史を書いてほしいと要請しているところがあります。中野は「そうすれば、ヴァレリーとかアランとかいう言葉を聞くとぞつとするというような馬鹿なことがなくなると思います。」とありますが、それを受けて、渡辺の返信には、「ただ我々がいくらがんばっても、出版屋やジャーナリズムの無理解からどうにもならぬこともあります。それだけにアランとかヴァレリーといふとぞつとすることがあるといふ大兄のお気持ちはよく判ります。私もぞつとすることがあるからです。しかし、これは紹介者だけの罪でなく、広く一般読書人の跛行の故でもあります。』<sup>13)</sup>。このように明るい面がみられます。それだけに、「敗



戦日記」に描かれた苦しみの描写はその真実な事実性において稀有の価値があるのだと思います。

最後に、終戦直後の8月18日付の日記に「母国語」で書く歓びを述べ、また、8月25日付の串田氏への手紙には、「腐儒瓦全の志をとも角もとげた以上は、今度は玉砕の心をかためねばなりません<sup>14)</sup>」と日本の将来へ向けて玉砕すると抱負を述べています。瓦全は「なにもしないでいたずらに身の安全を保つこと」であり、玉砕とは正反対の意味ですが、こうした言葉からもユマニスト渡辺一夫らしさが深く感じられます。ご覧になった「自画像」は日記中の「自我像」と同質であり、ともに、ユマニスト渡辺一夫の生き方を深く伝えるものであると思います。

〔注〕

- 1) 串田孫一・二宮敬（編）『渡辺一夫敗戦日記』博文館新社、1995年。
- 2) 中野重治「渡辺一夫さんへ」『中野重治全集』第12巻所収、筑摩書房、1979年、435頁。
- 3) 野坂昭如『「終戦日記」を読む』日本放送出版協会、2005年。
- 4) 同上、13頁。
- 5) 『渡辺一夫敗戦日記』30頁。
- 6) 二宮敬「解題渡辺先生の『日記』について」『渡辺一夫敗戦日記』所収、218頁。
- 7) 中野重治「渡辺一夫さんへ」435-437頁。
- 8) 大江健三郎『日本現代のユマニスト渡辺一夫を読む』岩波書店、1984年、16-29頁。
- 9) 『渡辺一夫敗戦日記』8頁。
- 10) 同上、11頁。
- 11) 近藤信行、『THIS IS 読売』1996年7月号、268頁。
- 12) 『渡辺一夫敗戦日記』113頁。
- 13) 「往復書簡」『展望』1949年3月号所収、38-41頁。
- 14) 『渡辺一夫敗戦日記』104頁。

\* 討議要旨

顧偉良氏は、「書き手の意識」と「読者の意識」に関する言及があったが、渡辺一夫の中ではどのように両者は捉えられ結びつけられていたのか、また他者意識との関連はどうなっているのか、と質問した。